

図書館ニュース

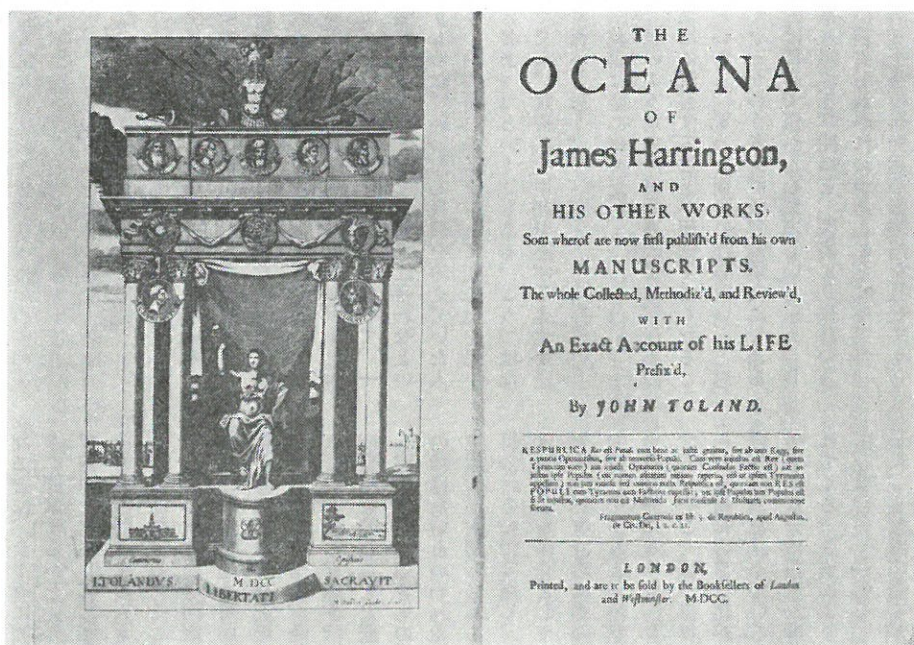
No. 8

1968

43・1・10・発行

発行人 園田 義道

発行所 東京都文京区白山5丁目28番の20号 東洋大学附属図書館



ハリントンの著作集より

図書館への要望

本学名誉教授 佐久間 鼎

世々の生活の知恵が積り積って文書の形でのちに世代に伝えられる。後代の人は、これを善用して大きな利益をうけることができ、これを広く適用して新しい工夫、発明を成就し文明を進展させる。

有益な資料を保管して一般の利用に資するのが図書館の使命となった。古文書の保存ということ、細心の注意のもとに周到に行われている。

文庫の整頓、分類・目録作製は、随時に検索を可能にするための必須の手備行動だ。これを閲覧者の自由利用に対応するために、十全の用意をもつて実行しなければならない。供覧という任務は、図書館の、ことに学校附属の施設の重要な任務としなければならない。

知識の供与は万般の事項にわたって多数多様で、これを包容する宝庫は莫大な図書を収容することによってその使命に当たるが、その活発な運営は、集約的合理的に行なわれなくてはならない。

ここに至れば、図書館は、古い典籍の収蔵を任とする文書館とおのずから方向を異にして、現実の社会文化活動の一翼として、教化の任務を分担しなければならない。博物館・美術館が供覧・展観によって一般教化の活動を営むと同様に、図書館活動は重要な社会教化・一般教養の推進に大いにつとめなくてはならないと思う。

一方では漢訳の大蔵経、さらにはチベット語訳の仏教聖典、さらには四庫全書の収蔵もさいわいに達成され、その善用が期待されるが、他方月歩の諸科学の新鮮な情報も研究活動のために必須となつて、図書館活動もますます多端となつて来た。使命達成の方途を画策実現しなければならぬ。

図書の利用について思うこと

恩 田 彰

私は習慣的に図書や雑誌類を読んでいるが、図書をどのように利用しているかということはあまり考えたことはない。しかしここでは図書の利用について、気づいたことをのべてみようと思う。

(一)本を食べるということ

本を読んで、その内容を理解し、それを自分のものにしてしまうことが大切とされる。そこで内容をすっかり暗誦してしまうことが行われた。よく外国語の単語を徹底的に憶えてしまおうというので、辞書の一頁分を憶えたら、それを本当に食べてしまうことが、学生の間に行なわれたことがある。私はついに経験しなかったが、その意欲たるや大したものである。辞書を自分のものにしてしまおうという象徴的行動が実際の行動にまで発展したわけである。しかし今日のよう図書が氾濫しては、本は食べるどころか、読むことさえしない。見ては、捨てるという傾向も出てきている。

(二)読まなければならない本と読みたい本 私たちは仕事の関係で多くの書物や雑誌を読まなければならない。しかしその

全部が必ずしも読みたいと思っているものではない。仕事に忙しくなり、関係資料を読む時間が多くなればなるほど、それと関係のないもので読んでみたい本も出てくるものだ。読みたい本が沢山あって、それを読むことを楽しみにして、一生を過ごすことができれば仕合わせというものだ。いったん自殺を考えていた人が小説の面白さにひかれて死ぬの思いとどまったという話もある。こうではなくても、読書に生甲斐を感じる人生を送りたいと思う。

(三)読書は楽にやりたい

私のような怠け者にとっては、仕事のために読書することが面倒くさくなることがある。もっと簡単にならないかと思う。そういう意味では学術論文はできるだけ簡潔で短かくしてほしいと思う。日進月歩する学問ほど、図書より雑誌の方に重点がおかれつつあることは事実だ。ある企業の研究所の図書館を見せてもらったが、今後は図書はできるだけ少なくして、雑誌と抄録集だけにしたいといっていた。学問の性質によっては、何十冊

も厚い本を読まなければならないが、中にはうすい雑誌をもっと数多く読まなければならないことがある。その場合重要なことは、テーマに関する文献をどのようにに探索するかということである。そこで情報を収集し、整理する技術が進歩し、それを専門とする人も出てくる必要がある。そこで研究者は、そういう情報検索の専門家の協力をえて、独創的な研究を進めていくのである。そういう意味では、研究の進め方が、より分化されるとともに、その総合化が行なわれていくものと思う。

四書物を読むことと読まされること

書物は読むべきもので、読まされるものではないといわれる。すなわち読者の主体性が大切とされる。書物から何かが得られるのではなく、こちらから働きかけ、書物を媒介として、自己の中から引き出すべきなのである。書物の文字を眼で追っていると、注意が集中する。読書では文脈にそうして注意が集中しつつ移動する。そこで脳が自律的に活動し出す。そして精神の自律化が生ずる。すなわち自分が本を読んでいるという感じより、著者が自分に語りかけてくるように思われてくる。読書により著者と読者との間に「出会い」が生じ、そこに問答が行なわれ、また感応道交が生ずるのである。また本を読んでいるうちに、想像力と直観力とが働き出し、アイデアが浮んでくる。さらには思考力によって、思索が始

まるのである。何れにしても読書に没頭すると、精神は創造的に展開し、そのゆきつくとことを知らないのである。

(文学部教授)

図書館短信

—私立大学研究設備購入—
—図書の審査終る—

昭和四十一年度私立大学研究設備助成補助金で購入した図書の現物審査が、昭和四十二年十二月十三日、文部省事務官によって、行われ、無事終了いたしました。

法学部に対する文部省の追跡審査行わる

四十二年十月三十日法学部に対する、文部省の追跡審査があり、図書館に対しては、左記の二項について改善充実する様、通達があった。

一、図書館改築の計画をさらに促進すること。

一、図書費を増額し、教育研究上必要な図書をいっそう増強整備すること。

なお、その際基礎的な図書・資料の充実についても配慮すること。

以上

全国図書館大会とは、全国の公共、学校、会社等の図書館類縁機関の関係者が年一回集まり、図書館のもつ社会的使命にこたえる趣旨から当面する図書館の諸問題を討議し、経験を交流して有効な活動方針を確立し、広く国民の生活、産業、学術、教育文化に役立つ資料と情報を豊富に速やかに提供する図書館本来の機能的役割の樹立を検討し利用者の便宜を計る目的から大会がもたれている。

四十二年度の大会は十一月八日から三日間北陸の金沢市に、全国から約三千余名が集まり、十六ヶ所の会場を利用して研究発表並びに討議が活発に行なわれた。その概要は次の通りである。

大会の企画運営は、例年、開催県が担当することになっているので、今回は石川県知事が

会長になり県内の教育機関、図書館関係機関が主体になり、全国各種図書館協会の協力により企画運営された。第一日は型通りの開会式に続いてNDC賞の表彰式があり、昨年の東京大会での決議や要望事項について、文部省や出版界に働きかけた経過報告があり、東京国立博物館書室長の小松氏による「本との出合」についての講演があった、二日目は公共図書館の相互協力・公共図書館の機能・児童青少年読書・郷土の資料・読書運動・図書館協議会・大学図書館・学校図書館・短期大学図書館・インフォーマー・ジョンサービス・地方議会図書館・整理技術・図書館学教育・レファレンスサービス・図書館員の問題研究・高専図書館の各部会に分かれ、当面する問題点について発表、討議が行なわれた。私共は大学図書館部会と整理技術の部会に分かれて出席した。大学図書館部会では、

全国図書館大会

「大学図書館と国立国会図書館との相互利用について」、国会図書館の連絡部長から、国会図書館の組織と運用についての業務概説があり、大学図書館が国会図書館を利用する場合の手続方法を大学側に依頼も兼ねた説明があった。午後は東京大学伊藤図書館長の「図書館業務の機械化について」実際に歩いて来たヨーロッパやアメリカの機械化された図書館の現状をスライドをもつて説明され、我が国に於いても、でき得るものから機械化に取り組み、協同利用についても研究が必要である点を力説された。

整理技術の部会では「NDCの改訂にそなえて」改訂私案なるものを提出して駒沢の加藤図書館長の講演があり、「NDC改版に対する現場の意見が金光図書館の山

県氏から出された。午後は

「カード複製に関する技術以前の諸問題」について立正図書館の竹内氏の研究発表があり、続いて学習院図書館の秋場氏による「私立

大学図書館における目録カード複製の現状の調査報告」があつて、最後は東洋の山内氏による「本学図書館における目録カード複製の実情と昨年度図書整理の実情報告」で終った。三日目は全体会議で、前日の各部会の討議概要報告、並びに部会で提出された決議事項や要望事項の承認を得て、今年度の大会の幕を閉じた。

年々大会も軌道に乗り、会の運営は実に円滑に流れたが、文化の急速な発展から立ち遅れた感のする、図書館は、これから生ずる諸問題が余りにも多く、これに対処するための折角の大会が、時間的制約から十分討議されずに終ったことは残念だった。しかし日頃、日蔭的存在にあると思われる図書館関係者が、利用者の為に、遅れを取り戻そうと努力し熱心に研究している状態を、この

際十分認識してもらいたいと思うし、又一面、図書館関係者だけでは解決できない財政的、政治的面的問題も多くあり、大会が空回りで終わらないよう利用者の理解と一層の協力を要望したい。

(図書課長 望月武夫)

故名取俊三先生蔵書を寄贈される

本学の教授であられた故名取俊三先生が研究のため、ご苦心されて集書された貴重な図書二〇〇冊と雑誌五点二五〇冊、その他が御遺族のご好意によって図書館に寄贈されました。

その寄贈本は主として、経営学、財務管理(会計学)に関するものが多く、これに隣接する経済学、或は商学関係の文献もかなりあります。

殊に経営学、財務管理(会計学)に至る図書は入門書、概論書、実務書、論文集等々でこのほか、外国の文献としては、ドイツ経営学及びアメリカ会計学に関するものもあり、また、雑誌では「会計」「企業会計」をはじめその他数点に及んでいます。

図書館では先生の「寄贈図書」として永く伝えるべく一冊ごとに「故名取俊三先生寄贈」の印を押して、既に登録も済み、もった整理中ですので、先生方や学生諸君に利用して、いただく日も間近いことと思えます。

昭和四十二年十二月

(I 記)

ホップスやロックの如き多才な十七世紀の思想家たちが真剣に取り組んだ仕事の一つは、近代社会の成り立ちにおいて、国家の形成とその主権の在り方をいかに考えるべきかという課題であった。ここに紹介するハリントンも、わが国では前記の人々ほど有名ではないが、主著「オシアナ共和国」The Commonwealth of Oceana. 1656. その他の政治論文で、斬新な政治機構論を展開したすぐれた思想家である。

彼は一六一一年、イングランドのラットランドシャーで、地方貴族の長男として生まれた。同時代の一族の中から、一四四人もの有爵者を輩出した名門の出身である。このように生まれも育ちも貴族でありながら、彼はまぎれもない共和論者であった。一六二九年にオックスフォード大学を中退後、オランダ、デンマーク、フランス、イタリア、ドイツなどを旅行し、各地でさまざまな政治形態を見聞するとともに、その歴史的研究に没頭しているうちに、彼は共和政こそ近代社会に最もふさわしいものとの自覚を得たようである。

その彼も、市民戦争の間は王党派、議会派のいずれにも与せず、むしろ中立的な立場をとっていたが、チャールズ一世が処刑され、一六五一年残余議会によってイングランド史上唯一の共和国が実現してからは、青年時代より関心を抱き続けてきた共和主義理論の体系化に力を注ぎ、

ハリントン著作集「オシアナ共和国」ほか James Harrington: Works (London, 1700.)

次々と著作を発表した。しかし革命政府治下のイングランドでは、国の統治は国王、上院、下院の三者によって本来的にわかれるべきだという伝統的な混合王政観——そうした不明確な国家概念を打破するために、ホップスは彼の絶対主権論の著作「リヴァイアサン」を書いたのであるが——が次第に懐旧されるようになった。そこで、クロムウェルが歿し王政復古の聲がささやかればじめた一六五八年以降、ハリントンは同調者と共和政維持の運動を推進し、ロータ・クラブを結成して、著作やパンフレットによるハリントン主義の喧伝につとめた。しかし彼らの努力も空しく一六六〇年王政が復古するとまもなく、ハリントンは王政転覆の陰謀に加担したかどで捕えられ、ロンドン塔につながれた。その後病をえて釈放されたが、ついに名誉革命を見ることなく、一六七七年数奇な生涯をとしたのである。

さてハリントンの「オシアナ共和国」その他の著作は、近代民主主義思想の形成にどのような貢献をしたのであろうか。特に、クロムウェルに捧げられた「オシアナ」は、ペーコンの「ニュー・アトランチス」やモアの「ユートピア」と同じく、形式は

政治的ユートピアの構想にたつて、新しい架空の共和国の政治形態を叙述しているが、その実、内容は決して架空のものではない。「オシアナ」はまさにイングランドそのものであり、登場する人物も歴史的事件も、すべて仮名の実在なのである。

彼はまずこの著作の中で、古代イスラエルやスパルタ、ローマ、ヴェニスなどの社会経済史的比較研究の成果を開陳しながら、政治体制というものが従来ともすれば法的見地からのみ論ぜられる弊害を戒め、社会の経済力を無視してはそれが考えられぬことを力説する。つまり政治制度と経済構造との上下関係が不均衡を生じた時、破綻が芽生え騒乱が起きるのである。したがってイングランドでは既に大半の土地が民衆の所有に帰しているのに、依然として王政を護持しようとした点に革命の根本的原因があった。この見地にたてば、今後イングランドは当然共和政、つまり民主政を採らねばならないであろう。近代社会の経済的分析から、彼が王政、貴族政に代わって民主政治の必然的な到来を予言する理由はここにある。

例えば、専制化を防ぐために立法府を独特な二院制にし、代議士や官職につく者を「くじ」によって選び、しかも「輪番制」を確立して個人や一党一派の独裁の危険を回避しようという提案がそれである。これこそ民主主義的政治機構の根本となる権力分立主義の思想である。不幸にして彼の提案は、王政復古により一旦は挫折したけれども、彼の死後十年余りで名誉革命が起こり、彼の知見の正しさは立証された。そして法の支配する理想的な民主政を説いた彼の思想は、ロックにより発展的に継承され、更にその後のアメリカやフランスの社会変革期において、多くのイデオログに影響を与え、新しい政治制度の樹立にはかりしれぬ寄与をしたのである。

前述の如く、彼の主著「オシアナ」は一六五六年に出版されたが、その後「伝記」と他の論文を含む著作集が、トランドの編集により一七〇〇年にロンドンで刊行され、三十七年、四十七年、七一年と版を重ねた。一九六三年には西独の Scientia 社が、一七七年版を翻刻したが、本学図書館が所蔵するのは初版本で、縦三センチ、横二センチ、五四六頁に及ぶ皮表紙の豪華本である。活字、組版の様式、製本技術にも十七世紀的特徴がうかがわれるなど、研究者ならずとも一見に値いするもので、むしろ貴重書に指定されてしかるべきと思われる。

参 考 係

類 縁 機 関 案 内 (1)

資料調査に当って利用しうる各種の図書館及び類縁機関のうち、主要なものから紹介して行きたいと思います。

名 称	所 在 地	電 話	交通機関	利用資格 (入館料)	開 館 時 間	休 館	資 料	備 考
アジア・アフリカ図書館	三鷹市新川五三四	〇三三六	(京王) 仙川	一般五〇	九三〇～一六、三〇	祭月	アジア関係文献資料 (AVMを含む)	学生は不可
アジア経済研究所図書室	新、市ヶ谷本村町四二	四二三四	(地) 四ッ谷三丁目	研究者	一〇～一七(土二)	祭日月末		
アラブ文化センタ	文、指ヶ谷七四	〇八〇九	(都) 指ヶ谷	一般	九～一七(土二)	日		
イタリア政府刊行局	千、霞ヶ関三二二	六七八	(地) 虎の門	一般	九三〇～一七	日イの祭日	イタリア関係図書	
印刷図書館	中、新富町二二三	〇五〇六	(都) 新富町	一般	一〇～一八	祭日	印刷全般三、五〇〇点	「印刷図書館ニュース」(月刊) 「蔵書目録」(年刊) 貸出は会員登録制
英国大使館図書	新、左門町一三鈴木ビル内	〇四二〇	(地) 四ッ谷三丁目	一般	一一～一八	日イの祭日	英国関係図書二万冊	
旺文社出版文化センタ	新、横寺町五五	二二一一	(都) 北町	一般	九～一七(土二)	祭日	内外の出版文化に関するもの一、〇〇〇冊	
お茶の水図書館	千、神田駿河台二九主婦の友ビル	二二五一	(国) お茶の水	女子学生 二〇	一〇～一八	祭日第一月	戦後婦人雑誌一五万冊	一〇回券七〇円一八才以上
外国法文献センタ	文、本郷七三一一	二二一一	(地) 本郷三	一般	九～一七(土二、三〇)	祭日	世界各国の法令集判例集約三万冊	
科学技術館	千、代官町二	八四七二	(地) 竹橋	一般 大人二五 学生一〇	九三〇～一七	月	宇宙、科学等一四部門	「あんない」見学は一～二時 問要
紙の博物館図書室	北、堀船一一	三五四五	(国) 王子	一般	九～一七 九三〇～一六	祭日	和洋の紙に関する文献四、〇〇〇冊	
宮内庁書陵部	千、皇居内	一一一一	(都) 乾門	研究者	九～一七	祭日	宮廷中心の古文化資料	学部学生は不可
慶大、文学部図書	港、芝三田二二	二二一一	(都) 三田	一般	九～一八(土一五)	祭日	図書館学、児童文学	
倭成図書館	杉、和田一一二八	三四〇〇	(地) 中野富士見町	一般	八三〇～一六、三〇	祭月	四二、〇〇〇冊	貸出のみ(登録制) 「資料月報」レファレンス複写あり
弘済会館資料室	千、麹町五一弘済会館内	一四八代	(都) 麹町六丁目	要紹介	九三〇～一六、三〇 (土二)	祭日	社会福祉関係資料	
交通博物館図書室	千、神田須田町一一二五	八四四四	(国) 秋葉原	一般	一二～一六、三〇(土八)	祭	鉄道、交通関係約八、〇〇〇冊	
国際文化会館図書室	港、麻布鳥井坂二	九一五一	(都) 三河台	要紹介	九～一六、三〇(土八)	祭	欧米語による日本研究書特にアジア関係七、〇〇〇冊	会員登録(学生不可)レファレンス 「The Catalogue of the K.B.S. Lib. (1937)」
国際文化振興会図書室(K.B.S. Lib.)	港、芝白金台町一一五五	八一〇六	(都) 日吉坂上	要紹介	九～一七(土二)	祭日	欧米語による日本研究書一万冊	
国際連合資料センタ	千、永田町一一四NDL内	二二二二	(地) 国会議事堂前	一般	九三〇～一七	祭日	国連の記録、刊行物	

他大学学術関係交換誌一覧(その4)

本学と他大学との交換誌のうち、図書館では、1967年3月現在、301大学507機関より615種を受入れ、それを総記、人文科学、社会科学、自然科学部門に分け、先回社会科学にひき続き自然科学を記載しました。なお、各研究室宛で直送される交換誌について、またこの一覧の分類記載事項及び逐次刊行物の案内についての御意見を寄せ戴ければ幸いです。今回をもって、交換誌一覧を終らせて載きます。
(逐次刊行物係 林)

自然科学
愛知学芸大学 自然科学

A : 1—15 : '52—'66

愛知女子短期大学紀要(人文, 社会, 自然)

A : 1—16 : '50—'66

秋田大学 学芸部研究紀要(人文, 社会, 自然)

A : 2—16 : '52—'66

千葉工業大学研究報告(理工)

S—A : 1—8 : '62—'66

大同工業大学紀要

A : 1—2 : '65—'66

電気通信大学学報(理工学)

S—A : 1—21 : '50—'66

福島大学学芸学部 理科報告

A : 2—16 : '53—'66

岐阜薬科大学紀要

A : 2—14 : '52—'64

群馬大学紀要(自然科学篇)

A : 1/4—14 : '50—'66

欠 : 2, 3, 8

弘前大学農学部 学術報告

A : 5—12 : '59—'66

広島女子大学紀要(自然科学)

A : 1—2 : '66—'67

姫路工業大学 研究報告

A : (A) 16—19 : '63—'66

(B) 14—16 : '64—'66

北海道学園大学 開発論集

1/4 : '66

兵庫農科大学 研究報告

A : 1/2—1/2 : '50—'66

欠 : 1/4—1/4—1/4

北見工業短期大学 研究報告

A : 1/4—1/4 : '63—'67

熊本大学 教育学部紀要(自然科学)

A : 2—15 : '54—'67 欠 : 3

京都薬科大学 学報

A : 1—14 : '53—'66

三重県立大学 研究年報(自然)

1/4—1/2 : '52—'59

長崎大学 教養部紀要(自然)

A : 1/4—6 : '61—'66

名古屋工業大学 陶磁研究所報告

A : 1—3 : '59—'61

名古屋工業大学 窯業研究施設研究報告

不定 1—2 : '63—'65

日本大学 農獣医学部研究短記紀要(一般教養)

1 : '66

日本大学 理工学部一般教育教室彙報

6 : '65

日本獣医畜産大学紀要

A : 1—14 : '52—'65

欠 : 5, 10—13

新潟大学 教育学部紀要(自然)

S—A : 1/4—1/2 : '51—'66

大阪学芸大学紀要(人文)(自然)

A : 10—14 : '62—'66

大分大学 学芸学部研究紀要(自然科学)

A : 6—1/4 : '57—'66

岡山理科大学紀要

A : 1—2 : '65—'66

大阪府立大学紀要(農学, 生物学)

A : 15—18 : '64—'66

酪農学園大学紀要

A : 1/4—1/2 : '61—'65

信州大学 教育学部研究論集(自然)

A : 1—18 : '51—'66

昭和医科大学紀要

A : 6—10 : '54—'58

昭和医科大学 昭和医学会雑誌

M : 1/4—2/10 : '54—'66

欠 : 1/6, 1/4, 5, 2/9—9

水産大学校研究報告(自然科学)

7 : '66

鈴峰女子短期大学研究集報(自然)

A : 4—5 : '57—'58

東海大学紀要 海洋学部業績集

40年度

徳島大学学芸紀要(自然科学)

A : 4—16 : '59—'66

徳島大学 教養部紀要(自然科学)

1 : '66

東京電機大学会誌

A—3 : 255—272 : '60—'65

欠 : 267

東京電機大学研究報告

A : 8—12 : '60—'64

東京女子医科大学雑誌

M : 2/4—2/2 : '56—'58

東京工業大学学報

A—2 : 15/4—16/2 : '50—'60

東京工業大学 Series—B

A—5 : 15/4 : '50—'60

東京農業大学紀要

A : 7—9 : '63—'64

東京農業大学 農学集報

Q : 1/2—1/2 : '29—'65

東京農業大学 農村研究

S—A : 6—24 : '56—'66

欠 : 8, 9, 17, 18

東京写真短期大学

3 : '65

東京商船大学 研究報告

A : 3—11 : '53—'61

東京水産大学論集

1 : '66

宇部工業短期大学研究報告

A : 2/2—3 : '65—'66

宇都宮大学学芸部研究論集(自然)

S—A : 1—15 : '50—'65

早稲田大学 学術研究(自然)

A : 1—15 : '52—'66

早稲田大学 理工学部紀要

29 : '65

山形大学紀要(工学)

A : 1/4—1/2 : '50—'59

山形大学紀要(農学)

A : 1/4—1/4 : '50—'59 欠 : 1/4

山形大学紀要(自然科学)

A : 1/4—1/2 : '50—'65

横浜国立大学 理科紀要

A : 3—12 : '54—'65

図書館関係諸会議

(I) 学内 (II) 学外

(I) 図書館建設準備委員会(第11回)

42.12.12(火) 湯島会館

議題 : 八十周年記念事業計画としての白山における図書館建設について

図書選択委員会(42年度第4回) 42.12.21(木) 会議室

議題 : (イ) 図書選択 (ロ) その他

(II) 全国図書館大会

—金沢市観光会館等を会場として開催— 42.11.8~10

図書館の未来

——建築学から見た設計の予測——

前田 尚美

建築の設計を学ぶものにとってやっかいな問題は、建築物の耐用年限の問題である。物理的な耐用年限よりも、建物の空間の働きが使用の機能変化に応じきれなくなったときのいはば性能的な耐用年限が予測をこえて短くなってきていることである。よく例に出される場合として、百年も以前に建築された鉄道駅舎は、今日においてもなんとか使用機能を果たす場合があるが、十年前に建設された空港は、航空機自体の発展があまりに急激なためにもはや使用に耐えなくなってしまうものである。病院や研究所の建物もまた同様である。図書館建築は、これからまさに急激な変化に見舞われる種類の建物と考えられよう。

図書館を公共図書館と大学図書館に分けてみると、公共図書館は住生活環境施設として地域的に整備される必要があるが、一方では、「図書を読みに行く」といった施設利用の方法が変っていくのではなからうかとも考えられる。極端に云うと、頼みもしないのに舞い込むダイレクトメールのようにマイホームにサービスされていくのではないかとさえ考えている。テレビや読み捨て週刊誌、セット化された全集物や文庫本、はては百科辞典の氾濫が公共図書館を変えてしまうのではないだろうか。住宅地の開発計画を立案する場合、住宅地に必要な施設として公共図書館を予定しておくなど教科書的には書いてみるのだが……。

さて、大学図書館の場合も不要な問題が多い。膨大な専門的研究資料、情報の収蔵という点については、マイクロフィルムからマイクロフィッシュへと変っているし、もっと変っていくであろう。資料を収蔵し提供するという機能は変らなくても、その方法の体系が変わってしまうと、閲覧という方法もまったく変わってしまうのだから。

衣服や自動車ならば、使い捨てが可能なのだが、建築は重くて動かせない代物であるから、話としては「使い捨て」を考えてみてもよいが、実際には捨てられない。建物の箱だけは変えずに使用の部品を使い捨てするか、あらゆる変化に耐えられるように設計しておくというのともよからうかと思う。

ずいぶん、つまらぬ予測をたてるものだと言われるかも知れないのだが、建築設計をやってみると、その作業過程から素朴なかたちでこのように予測しなければならないのである。

丁度、通信教育の事務所のようなスペースが大学図書館であるとなるのかも知れない。事務所のスペースというものは、本来どんな事務的執務が行なわれようとも都合よく使えるように設計してあると考えてよいのであるから、図書館建築の設計において、建物の内部の使われ方がどのように変化しようともそれに耐えられるように設計しておくというのであれば、事務所のような建物をつくっておけばよいということになってしまふ。

話がどこかで脱線してしまつたようだ。脱線地点は大学図書館の建築設計を考える場合に、「大学」を十把一からげにして考えてしまつたからであつた。建築というフイジカルな姿を見なおしてみれば、白山なり、川越なりといった土地に土着すべきものを、自動車や航空機のように走り去ってしまうものと同じように見ていたためであつた。動かせないほど重い建物は無理に動くようにすべきではない。むしろ土台を深く掘り下げて、ビクともしないほど深い根入れを計るべきではないのか。よい地盤をさぐつてたしかかな土質を発掘していく必要があるのだから。

建築家に家を設計してもらつたら、住みにくい「建築家好み」の家をつくられて困るといった話が出ると、建築を学ぶものとして当惑顔になってしまう。その一方「素人好み」の家を建てたひとが、建築家に相談にこられたりする。設計はむづかしいものとみえるし、実際またむづかしい。そのむづかしさは、将来の生活の予測のむづかしさにある。予測は建築家だけにまかされるものではあるまい。第二に、その予測は普遍的に予測されるものであるのかという点にある。普遍的に予測されるものは「設計」しなければならないと考えている。第三に、オリジナリテイの発掘が必要なのである。大学図書館についてみれば、例えばわが大学図書館の収書方針とか、収蔵方針とか、あるいは閲覧方針とかである。これはたぶんアカデミイプランに従うものである。独自のアカデミイプランの発掘もまた設計条件を規制する。公共図書館の場合にはソーシャルプランまたはコミュニティプランであらう。

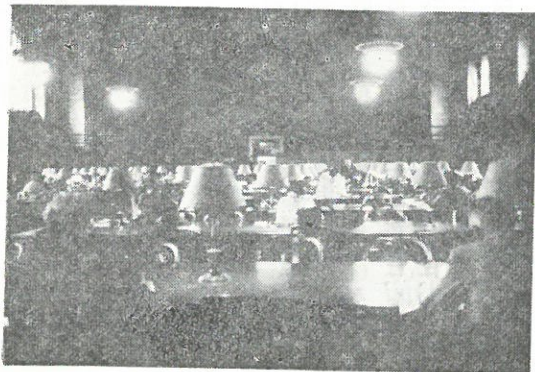
設計にとりかかる前に計画すべきものをまとめておけばよい。設計の資料よりも計画の資料が必要とされるのである。日本語で「計画」「設計」と訳すべき外国語（例えば英語）の語彙は豊富なのに、日本語ではあまりに狭義な技術を示す概念にとどまらずに思ふように思う。

アメリカの市民図書館

岩村 一夫

ニューヨーク・パブリック図書館

ニューヨークで生産性本部の調査団は解団したので、それぞれヨーロッパ回りや帰国の途につかれた人が多かったが、わたしは十月一日からボストンで開かれるアメリカの公認会計士試験委員協会と公認会計士協会の大会に出席することになった。そのため、二日ばかり自由日があった。例のエンパイア・ステート・ビルに入ろうとしたが、あいにく雲り空で視界ゼロとあって入場はお断わり、日本なら見えようが見えまいが切符を売ってエレベーターで運びあげるが、やはりお国がら、展望というサービスが定めなら入場券は発売しない。取引は明快である。そこで五番街を中央公園の方へ写真をとりにながら上ると、鳩の群がる古典的な建物がある。入口の巨大な円柱の上部には、「ニューヨーク市民図書館」の名が画かれ、そのまた上部には初期の建設者らの六人の像が行き交う自動車の流れを見送っている。わたしは早速なかに入って



ニューヨーク市民図書館大閲覧室

インフォメーション係の人に参観させてほしいというと、三階の東洋部に木村さんがいるからそこに行けとていねいに案内してくれる。わたしは早速内部を見ながら東洋部にミス木村さんを訪ねる。木村さんは心よくわたしの意をくんですぐに所長室に案内してくれる。所長から一応の説明をきくとすぐに会計図書部主任

に紹介される。この主任さんは一生懸命にAICPAの目録などを示して、会計文献のさがし方などを説明してくれるが、こちらすでに承知のことばかり、さらに主任と木村さんは大きな書庫に案内し、会計、経済図書や日本関係の図書類を見せてくれる。意外に日本のマルキシズムに関する経済書の多いのには一寸驚く。

ニューヨーク市民図書館は一八三八年にジョン・ジャコブ・アストラーという移民少年の成功者がマンハッタンの上町の田舎家に開館したのが初まりといわれる。そしてこれを監督し集書に従事したのがジョセフ・ダリオン・コグスウェル(七六—二三)という元校長先生である。アストラー氏は一八四八年三月二九日になくなったが、この時に図書館資金四〇万ドルが残されたというから大したものである。

この当時の図書館というのは、単に図書資料を利用させるということよりも、今日のコンサルタントのように諸事相談に応じたもののようである。あらゆる年令と階層の人々に最上にして最も健康的、知性の食事を提供することが、現在にまで継承されているところの図書館精神であるといわれる。

アストラー図書館のほかに、当時ジェームス・レノックス(James Lenox)氏の文学関係の特色ある蔵書館が一八七七年ころ五番街のずうっと上の方(七〇〇

七一丁目通り)に建造されたがこれも後のニューヨーク図書館の蔵書の基礎となっている。

これらの私的財団による図書館とニューヨーク市がパートナーシップ協約を締結して耐火建築による現在の図書館を形成するに至ったのは一八九七年で、大理石造りのこの建物が九百万ドルをかけて完成開館したのは一九一一年である。当時の蔵書は百二十万部、一九六四年には四百五十万部、各地の分館が八〇ヶ所にある。これらのなかには、婦人小供館や盲人専門図書館などがあることはいうまでもない。

最近では、演劇、音楽、舞踊に関する資料を中心とする芸術図書及び美術館がリンコンセンタリーに造られ、また本館の専門図書化に伴って、大学生や一般公衆のための読書室中心の増館が本館の近くに建造されている。至れり尽せりのこの図書館サービスに細かくふれる必要はないであろう。しかしニューヨーク市が、世界都市としての市民の知恵を愛し、図書を尊重する結果がこの図書館行政となるものでありそれがまた、単に市の役人だけの仕事としないで、それぞれの蔵書財団とパートナーシップを組んで完璧を期しているのである。

当時入手した資料によると、一九六三(四)年度の総収入金は約一千六百万ドル、支出は一千六百四十三万ドル(約六九億円)、収入の半ば以上(五二%)が市



ニューヨーク市民図書館正面入口

の負担、州の援助が一六%、基金利子収入が二三%である。支出のおもなものは、給与及び福利費が約八〇%、図書雑誌購入費が二百二十八万ドル(約一四%)である。購入費が円で八億二千万円、収入に比して少ないようにも思われるが、図書館の累積された資料の管理的機能を考えれば、図書の購入の数倍の維持と管理とサービス費用のかかることは当然である。

一九六四年六月に終る一年間の利用者は本館だけで三百七万四千一人、一日平均八千四百人、蔵書数は三百二十九万二千冊、パンフレット、写本、レコード、マイクロフィルム等一切の資料類は一千四百三十四万五千点、この年の増加数量二十

五万点である。わたしは図書館の専門でないから、こういう数値がどれだけの意味があるのかよくわからないが、持出し禁止のもの四百三十七万七千(写本、地図、マイクロフィルム、レコード、楽譜を含まない)、貸出部門のもの三百十七万七千冊(成人向六六%、若人向三四%)、その他分館や貸出のものを含めて一千三百四十五万六千冊である。街角や巡回自動車図書館までもって市民にサービスするこの図書館制度は、中央にデンと構えて利用者の来るのを待機し、受験者の行列をつくらせるといふ日本の制度と本質的に異なるように思われた。

図書館は決してめずらしい本や資料の貯蔵庫であつてはならない。図書館管理者の苦勞は、どうして蔵書を利用者である先生や学生の研究や学習に役立てるかにある。大学の図書館が専門学部や専攻の研究室別に充実しようとし、市民図書館が分館や巡回貸出班を設けて市民の書齋と直結しようとするのは、図書館の有用利用という近代的目的に合致しようとする傾向ではあるまいか。中央図書館の歴史的、管理的職能と、利用者別動態的図書館の機能的職能とは、今後ますます明確に別れるものと思われる。

ボストン中央図書館

アメリカ公認会計士試験委員会と公認会計士協会の年次大会に出席のためニューヨークからエアータクシーでボストン

についたのは九月三十日の午後、会場にあてられたボストン・シエラ・トンホテルで参加登録をすますと多少時間があつたので市内見物にかけた。

有名なクリスチャン・サイエンスビルの上に彫り込んだ銘文を見たり、日本のニコライ堂と同じようなドームのクリスチャン・サンエス教会のすがたに、京都と姉妹都市であつたことを思い出し、古都ボストンの空気を大きくすい込みたいと思つた。

ポップコンサートで有名なボストン交響楽団の本拠のドッシリしたレンガとモルタルのシンフォニー・ホールの前に出る。これが冬のベト・ヴェンやブラームスのシーズンから春のポップスのシーズンに



ボストン市民図書館(秋風の強い日でした)

迎えると、壁の色からフロアのじゆうたんの色まで替えて、座席は椅子とテーブルを並べ、軽い食事と飲物を口にしながら演奏を楽しむボストン市民のホールかと思うとなつかしみは一段と深い、わたしの行った時はまだシーズンオフでこのホールも人影もなかったが、幸にも二日の夜はホテルでフイドラーの指揮する軽快なポップスコンサートに接し、一同が手を打ちメロデーを唱和する清新な人々の心に通ずるコンサートの楽しさを感じて、しみじみ味うことができた。

古いボストンには古い黒人街がある。しかしニューヨークのように廃退の空気の少ない清潔な黒人街を東にまわってハイウェーの交差する中央部のコーン・ブレイ広場になると、リチャード・ソンのトリニティー・チャーチと対照的にルネッサンスの古典をアメリカ風に近代化した壮重で優雅なボストン中央図書館があるこの図書館の開始は一八五二年、ここに建築されたのは一八八八年である。

建物の正面の上部の石文には、「ボストン市の公共図書館は市民によって建設され、学問の振興にささげるものである」と彫られている。

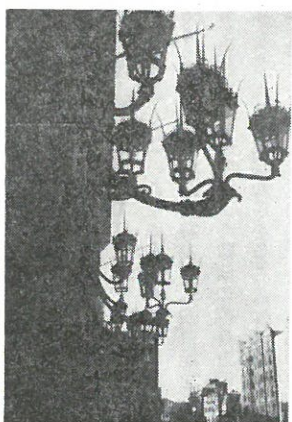
そしてその下の中央入口の四つの重い煉鉄の門扉の横には六つのランタンが大きな燭台に支えられ、学びの灯を照らすようになっている。この日はつめたい秋風が吹きまくって、図書館前は新聞紙が舞い上っていた。

このランタン横の入口から入るとホールになっていて、フロア、壁面、アーチ形の天井などすべてがピンク色の大理石づくめである。

このインフォメーション・デスクには美しい金髪さんが二人、わたしの下手な会話をとにかくくみとって自由に参観してくれという。時間の関係もあるので特別に面会しないで館内を一巡する。

館内は図書館というよりは美術館であり、館自体が偉大な美術品である。大きくはないが中庭の噴水に映える金色の陽光は中世への静じやく境に人の心をうばいとられるような気がした。アメリカにおける前代と現代、さらに未来を結ぶタイム・トンネルは決して創りばなしではないような気がした。

二階の閲覧室は偉大なローマンバスを想わせるといわれるが、長さ二一八フィート、幅四二フィート、高さ五〇フィート、



ボストン図書館のランタン

ト、まあ一寸東京駅の南口ホールを大理石で包んでその中で読書する姿を想像して見ればよいでしょう。館内の美しさはきりがなからアメリカの京見物と思っ

ていただきたい。
ボストン図書館が開設された一八五二年末の蔵書は九千六百八十八部といわれているから、極めてささやかなものであった。それが一世紀後の一九五一年末には、一九二万五千部に及んでいる。一九六五年には約二二一萬部である。歴史の流れとはいふものの、単なる年月の経過だけでは蔵書は増加しない。

中央図書館のほかに分館が二七ヶ所、自動車による移動図書館と学校や病院サービスを含めて図書だけの貸出数が一九六五年で三一〇万部と報告されている。回転率は一、三四倍である。同じく一九六五年の総支出金は四百二十二万ドル、円にして十五億一千九百五十六万円である。その九三、六%が市財政支出でまかなわれている。このほかに設備などの臨時支出を加えると九八%がボストン市の財政支出で、約二%が寄付金などの基金収入である。

支出は人件費が三百十三万ドル（七四%）、図書等の購入費四十六万ドル（一〇、九%）である。さきに述べたニューヨーク図書館に比較すれば、その四分の一程度ではあるが、その予算額だけで優劣を語るべきではないであろう。

るべきではないであろう。

わたしは、ボストン図書館の壮麗さに心をうばわれたのではないが、これ以上に蔵書の質量について特別の情報を求めようとはしなかった。一六〇〇年代から蔵書と教育に心のそそがれたハーバードと、近代工学のメッカといわれるマサチューセツ工大をそだてあげた古都ボストンの人に、そんなことを聞くだけやばである。

ベートーベンやリストを愛するとてもに、近代人の心に響くポップの軽妙な編曲と演奏を熱愛するボストン市民はレングとモルタルの古い建造物を保存するとともに、五〇階層の超近代的新都市の創造に努力を傾けている。この華麗な大理石のドームの下で日刊紙を読むだけでも市民は満足なのであろう。若い学生、中年の婦人、そしてこのアイアンの門をくぐる老人の目にも、喜びの明るい光明が輝いているように、独り旅びのわたしには感じられた。

（経営学部教授）

マイクロフィッシュ

我国では現在の処マイクロフィルムが資料の保存や複写の主役であるが、海の向うではマイクロフィッシュというものが登場した。マイクロフィルムはロールフィルムを使うので、一本の長いフィルム

に収められたものの中から必要な部分を検出するには一巻全部をリーダーにかけなければならぬので、時間もかかるしフィルムに傷がつきやすい。

マイクロフィッシュは四×六インチのシートフィルムを使って、一枚にA四版六十頁分を収められる。フィルムの上には検索用の記号が入り丁度目録カードのようにケースにファイルされる。

マイクロフィッシュの利点としては一、一つの論文が一枚のフィルムに収まる。

二、検索が容易。

三、リーダーにかけてもフィルムに傷がつかない。

四、マイクロフィルムよりも更に小さいスペースに保管できる。

五、郵送に便利な寸法。

があげられる。すでに米国政府刊行物は、印刷物とマイクロフィッシュの二種で刊行されており、マイクロフィッシュは印刷物の四分の一の値であり、航空便を用いても尚三分の一の値である。

日本ではマイクロフィルムの施設さえ充分でなく未だマイクロフィッシュは一般化されてないが、外国ではマイクロフィルムにとって代りつつあり、印刷物に比して非常に廉価で入手できる。

工学部分館ではマイクロフィッシュの到来に備えて目下受入方法を研究中である。

分館員 米山大恵